

〔論文〕

三島由紀夫「橋づくし」の表現

水 藤 新 子

- 〈目 次〉
- 1 はじめに
 - 2 対象作品
 - 3 人物描写 [92例]
 - 3.1 小弓 [11]
 - 3.2 かな子 [17]
 - 3.3 満佐子 [31]
 - 3.4 みな [18]
 - 4 情景描写 [35]
 - 4.1 橋とその周囲 [18]
 - 4.2 光陰と天候 [17]
 - 5 比喩表現 [77]
 - 5.1 指標比喩 [33]
 - 5.2 結合比喩 [44]
 - 6 反復表現 [31]
 - 7 まとめ

1 はじめに

「橋づくし」(昭和三十一年)は、私がかねがね短編小説といふものに描いてきた芸術上の理想を、なるたけ忠実になぞるやうに書いた作品で、冷淡で、オチがあつて、そして細部に凝つてゐて、決して感動しないことを身上にしてゐる。

表題作として本作品を収めた短編集の「あとがき」である。絢爛豪華な建築のように重厚で、海外でも高く評価される作品を多々ものした作家自身が、このように述べた「橋づくし」とは、いかなる物語か。「芸術上の理想」は思想の問題、「オチ」は物語構成の問題だが、「冷淡で」「細部に凝つてゐる」点はことばのあり方にも多々現れるだろう。こうした観点に立ち、言語表現の面から本作品を読み解いていきたい。

2 対象作品

「橋づくし」は1956(昭和31)年、『文藝春秋』12月号に掲載された。翌1957(昭和32)年、同名の短編集として文藝春秋社から刊行されている。

陰暦8月15日の満月の夜、花柳界に伝わる橋づくし(実際は架空の風習)に臨み、築地界隈の七つの橋を無言で渡り切ることで大願成就を目論む女性四人の姿とその顛末を描いた、原稿用紙にして30枚程度の小品である。

テキストは新潮社刊『三島由紀夫短編全集』下巻を用い、旧かな旧字体表記と振り仮名はテキストに従った。()内は論者による注記である。

3 人物描写 [92例]

陰暦八月十五日の夜、十一時半にお座敷が引けると、小弓こゆみとかな子は銀座板いたじんみち甚道わけかつらやの分桂家へかへつて、いそいで浴衣に着かへた。ほんたうは風

呂に行きたいのだが、今夜はその時間がない。

本作品はこのように始まる。主たる登場人物——小弓・かな子・満佐子・みなの女性四人（登場順）が、どのように描かれているかを見ていく。

3.1 小弓 [11]

- 1 小弓は四十二歳で、五尺そこそこの小肥りした體に、巻きつけるやうに、白地に黒の秋草のちぢみの浴衣を着た。[602頁-上段-5行目]

他の三人とは世代の離れた年増の芸妓である。彼女はこのところ奇妙な体調の異変に悩まされていた。「お座敷の前と後とに限つて」「突然發作に襲はれたやうに腹が空くのである」。

- 2 小弓は自分の腹工合のことばかり考へてゐた。今夜のお座敷は、最初が米井である。最後が文迺家である。文迺家で夜食をして來ればよかつたが、時間がないのでまつすぐ着換へにかへつて、又行先が米井では、夕食をした臺所で、一晚のうちに又夜食を催促しなければならぬ。それを考へると大そう氣が重い。[603-上-22]

しかし事情を知る米井の娘・満佐子のはからいで夜食を摂り、心おきなく橋づくしの先導役に立つのだった。

- 3 「まあ、お嬢さん、粹ねえ。黒塗りの下駄に爪紅なんて、お月さまでもほだされる」／「爪紅だつて！ 小弓さんつて時代ねえ」／「知つてるわよ。マネキンとか云ふんでせう、それ」[606-上-11]

ごく自然に「爪紅」の語が口を突いて出て、外来語の「マニキュア」と「マネキン」を混同する。若い「かな子と満佐子は顔を見合はせて吹き出し、氣のよい旧世代を小馬鹿にしている節があるが、願掛けのためにわざわざ夜集まろうとする気持ちに世代差は感じられない。

- 4 満佐子は（映画俳優の）Rと一緒にになりたいし、かな子は好い旦那が欲しいのである。そして（略）小弓はお金欲しいのである。

[606-下-6]

小弓、かな子と満佐子とは「願事」の質が決定的に異なる。現実を見据

え身の振り方を考えている芸妓と、非現実的な恋に恋する素人の差であろう。ただし小弓は、実際の橋づくしが始まるとこのようなことを考えだす。

5 小弓は先に立って歩きながら、自分の前には人通りのないひろい歩道だけのあることに満足してゐる。誰にも頼らずに生きてきたことが小弓の矜りなのである。そしてお腹のいつばいなことにも満足してゐる。かうして歩いてゐると、何をその上、お金をほしがつたりしてゐるのかわからない。[606-下-9]

自らの人生に疑問を持たず陽気な彼女にとって、今回の願掛けはあくまで余興であって、差し迫ったものではないのだ。

6 小弓は自分の願望が、目の前の舗道の月かげの中へ柔らかく無意味に融け入つてしまふやうな気持がしてゐる。硝子^{ガラス}のかけらが、舗道の石のあひだに光つてゐる。月の中では硝子だつてこんなに光るので、日頃の願望も、この硝子のやうなものではないかと思はれて来る。

[606-下-14]

当時の舗道はアスファルトではなく、切り餅様の敷石が並べられたものであった。その隙間に潜り込み日頃は目につかないガラスの破片が、月の光に照らし出される。願望がないわけではないが、それは今すぐという切迫感のあるものではなく、日常これと言って不満はない小弓の心情が、清新な比喩と重ね合わせて説かれている。

3.2 かな子 [17]

小弓とは親子ほど年の違うかな子は、満佐子の幼馴染でもある。

7 満佐子はかな子と一等気が合った。同い年だといふこともある。小學校が一緒だといふこともある。どちらも器量が頃合だといふこともある。[603-下-20]

8 かな子はそれに大人しくて、風にも耐へぬやうに見えるが、積むべき経験を積んでゐるので、何の氣なしに言ふ一言^{ひとこと}が満佐子の助けになることもあつて頼もしい。[604上-3]

若いなりに花柳界の女として生きて来たかな子は、世間知らずの満佐子にとっては頼れる存在となっている。しかしながら、彼女の「経験」がそれほど豊かなものでないことは、次の記述から明らかである。

9 かな子は二十二歳で踊りの筋もいいのに、旦那運がなくて、春秋の恆例の踊りにもいい役がつかない。これは白地に藍の観世水くわんぜみづを染めたちぢみの浴衣を着た。[602-上-7]

10 「けふ役の発表があつたのよ」／と坐るなり、かな子は貧しい口もとを歪ませて言つた。(略)／「又、唐子の一役きりだわ。いつまでたつてもワンサで悲観しちまふ。レビューだつたら、萬年ラインダンスなのね、私つて」[604-上-15]

不運を託つ表情を、眼差しでも横顔でもなく「口もと」に焦点を当てて描き、しかも「貧しい」と評していることに注目したい。かな子が美しい女ではないことが、実にさりげなく述べられている。彼女と満佐子が気の合う理由について同級生だというばかりでなく「器量が頃合だ」と書かれていた点を思い返すと、満佐子もやはり美しくはないと知れる寸法である。

そのせいかどうか、これまで運らしい運に恵まれてこなかったかな子は舞台での引き立てよりも、後ろ盾になるよい旦那を求めている。

11 かな子は、肥つた金持の中年か初老の男を夢みてゐる。肥つてゐないと金持のやうな気がしない。その男の庇護そそがひたすら惜しげなく注がれてくるのを、ただ目をつぶつて浴びてゐればよいのだと思ふ。かな子は目をつぶることに馴れてゐる。ただ今までは、さて目をあいてみると、當の相手ももうゐなくなつてゐたのである。[607-上-15]

12 いい旦那がすぐ目の前にゐて、手をのばせばつかまらうといふときに、その手がどうしても届きさうもない心地がかな子はしている。

[609-下-15]

決まった旦那が欲しいと思つても具体的なパトロンイメージはふくらまず、将来への不安を抱きながら妙に諦めがよい。一方で「山出し」の女中みんなに対しては「一寸大した用心棒だわね」「あらいつぱしだわね」と小馬鹿

にする。型にはまった昔ながらの世界で、ごく型にはまった価値観を持ち、個性に乏しい女性として描かれているかな子は、願掛けの途上俄かに腹痛を得て脱落することになる。

3.3 満佐子 [31]

13 勝気な満佐子は、色事については臆病で子供っぽい。満佐子の子供っぽさは評判のたねで、母親もタカを括つてゐて、娘が萩の浴衣なんぞを誂へても氣にもとめないのである。[604-上-5]

満佐子は新橋の料亭の娘らしく、その柄の衣裳を着ると妊娠するという花柳界の迷信に従って「萩のちりめん浴衣」を着るような娘だが、実際に何か事を起こすというわけではない。

14 満佐子は早大藝術科に通つてゐる。前から好きだつた映畫俳優のRが、一度米井へ来てからは熱を上げて、部屋にはその寫眞を一杯飾つてゐる。そのときRとお座敷で一緒に撮つた寫眞を、ボーン・チャイナの白地の花瓶に焼付けさせたのが、花を盛つて、机の上に飾つてある。[604-上-10]

15 満佐子はRの甘い聲や切れ長の目や長い揉上げを心に描いてゐる。そこらのファンとちがつて、新橋の一流の料亭の娘がかうと思ひ込んだことが、叶へられないわけではないと思ふ。Rがものを言つたとき、自分の耳にかかつたその息が、少しも酒くさくはなく、香はしかつたのを憶えてゐる。夏草のいきれのやうに、若い旺んな息だつたと憶えてゐる。一人であるときにそれを思ひ出すと、膝から腿へかけて、肌を漣が渡るやうな氣がする。[607-上-4]

たまたま訪れた俳優の笑顔が営業用に過ぎないことも見抜けず、本気で思えば結ばれると信じ込むような幼さを抱えており、同世代の女中に対しては「^{けんだか}権高な聲」を出す。経済的に不自由のない環境に育ち、戦後の文化的進歩的教育を受けてはいても、結局は世間知らずの「箱入娘」なのである。先述のように萩の柄の浴衣を着たり、橋づくしを試みたり、芸妓でもないのに芸

妓らしい振る舞いを最も熱心に行っているのも満佐子のように見える。

3.4 みな [18]

女だけで夜の街をうろつくことを心配した満佐子の母親が、女中に伴を命じた。「一ト月ほど前に東北から来た」ばかりのみなである。

- 16 答は胴間聲で、こちらの感情がまるつきり反映してゐないやうな聲である。姿を見ると、かな子は思はず笑ひを抑へた。妙なありあはせの浴衣地で拵へたワンピースを着て、引つかきまはしたやうなパーマネットの髪をして、袖口からあらはれたその腕の太さと云つたらない。顔も眞黒なら、腕も眞黒である。その顔は思ひきり厚手に仕立てられてゐて、ふくらみ返つた頬の肉に押しひしがれて、目はまるで絲のやうである。口をどんな形にふさいでみても、亂杓齒のどの一本かがはみ出してしまふ。[605-上-8]

小弓、かな子、満佐子に較べ、具体的で情け容赦のない外見描写がなされている。他の三人とは全く異質な存在であり、このような伴を連れて歩くことに不服な満佐子は当然のように邪慳にする。では、当のみなは何を思い、何を考えているのだろうか。

- 17 「はい」とみ中は答へたが、本當にわかっているのかいないのか不明である。／「どうせあんたもついて来るんだから、何か願ひ事をしなさいよ。何か考へといた？」／「はい」／ とみ中はもそもそした笑ひ方をした。[605-下-13]

- 18 みなが黙つてついて来てゐた。頬に両手をあてて、ワンピースの裾を蹴立てて、赤い鼻緒の下駄をだらしなく轉がすやうにしてついて来る。その目はあらぬ方を見てゐて、一向眞劍味がない。[607-上-22]

願ひ事を考えたと「もそもそ」笑い、歩きながら「目はあらぬ方を見て」 「一向眞劍味」が感じられないまま、「何かの感情を掘り当てることはむつかしい」顔つきで、三人の後ろからただ黙々として来るのである。

しかしながら、作者が「冷淡で、オチがあつて」というこの物語の趣向は、

実はこのみなに負うところが大きい。これについては後述する。

4 情景描写 [35]

無言の行である橋づくしが始まってからは会話がない。それを補うかのよ
うに、夜の街の情景が丁寧に描かれている。

4.1 橋とその周囲 [18]

19 小弓が先達になつて、都合四人は月下の昭和通りへ出た。自動車屋
の駐車場に、今日一日の用が済んだ多くのハイヤーが、黒塗りの車体
に月光を流してゐる。それらの車体の下から蟲の音がきこえてゐる。

[606-上-16]

19' 今日一日の用が済んだ多くのハイヤーの黒塗りの車体に、月光が流
れてゐる。

ハイヤーの黒い塗装に月の光が反射している。光を、静止した平面的なも
のではなく、液体状の動的なもの^と捉えた隠喩である。19'のように主体を
「流れる」光とせず「流す」ハイヤーの側とした点は、非情物を有情物に置
き換える活喩となっている。「今日一日の用が済んだ」ハイヤーの気楽さを
も表しているように感じられる。

20 四人は東銀座の一丁目と二丁目の堺のところ^で、昭和通りを右に曲
がつた。ビル街に、街燈のあかりだけが、規則正しく水を撒いたやう
に降つてゐる。月光はその細い通りでは、ビルの影に覆はれてゐる。

程なく四人の渡るべき最初の橋、三吉橋がゆくてに高まつて見え
た。それは三又の川筋に架せられた珍しい三又の橋^{かど}で、向う岸の角に
は中央区役所の陰氣なビルがうづくまり、時計台の時計の文字板がし
らじらと冴えて、とんちんかんな時刻をさし示してゐる。橋の欄干は
低く、その三又の中央の三角形を形づくる三つの角^{かど}に、おのおの古雅
な鈴蘭燈が立ってゐる。鈴蘭燈のひとつひとつが、四つの燈火を吊し

てゐるのに、その凡てが灯つてゐるわけではない。月に照らされて灯つてゐない灯の丸い磨硝子の覆ひが、まつ白に見える。そして灯のまはりには、あまたの羽虫が音もなく群がつてゐる。[607-下-17]

「三叉の川筋に架」かる三吉橋は途中から二股になっており、この「二邊を渡ること、橋を二つ渡つたことになる」と考えて選ばれた。「街燈のあかり」は「水を撒いたやう」、ビルは「陰氣に」「うづくま」と見るのも比喩的発想である。前者は比喩指標「よう」を共起させる指標比喩（直喩）、後者は19同様活喩の中でも、人ならぬものを人に喩える擬人法を用いている。

21 **第三の橋は築地橋**である。ここに来て気づいたのだが、都心の殺風景なかういふ橋にも、袂には忠実に柳が植えてある。ふだん車で通つてゐては氣のつかないかうした孤獨な柳が、コンクリートのあひだのわづかな地面から生ひ立つて、忠実に川風をうけてその葉を揺らしてゐる。深夜になると、まはりの騒がしい建物が死んで、柳だけが生きてゐた。[609-上-2]

「ここに来て気づいた」のは誰か。先頭を歩く小弓の視点のようにも思われるが、これは語り手自身の発見だろう。都心の橋を「殺風景」、近代建築を「騒がしい」とする美意識は、書き手である三島自身のそれと大きく重なるものと考えられる。

22 **第四の橋は入船橋**である。それを、さつき築地橋を渡つたのと逆の方向へ渡るのである。入船橋の名は、橋詰の低い石柱の、緑か黒か夜目にわからぬ横長の鉄板に白字で読まれた。[610-下-9]

白字で書かれた橋の名が闇夜に浮き上がるさまを、「書かれていた」ではなく「読まれた」としている。橋の名を記す側でなく、街を行き来しつつその名を認める側の視点に立っている。かつて橋を造った誰かではなく、今現在その橋を見ている人物の「目」を感じさせる表現である。

23 やがて左方に、川むかうの聖路加病院の壮大な建築が見えてくる。それは半透明の月かげに照らされて、鬱然と見えた。頂きの巨きな金

の十字架があかあかと照らし出され、これに侍するやうに、航空標識の赤い燈が、點々と屋上と空とを劃して明滅してゐるのである。病院の背後の会堂は灯を消してゐるが、ゴシック風の薔薇窓の輪郭が、高く明瞭に見える。病院の窓々は、あちこちにまだ暗い燈火をかかづてゐる。[611-上-12]

聖路加病院は「頂きの巨きな金の十字架」, 「ゴシック風の薔薇窓」, さらに消灯している「背後の会堂」の存在までが示され, 「半透明の月かげ」を浴び, 赤く明滅する「航空標識」が「侍する」ようだと高く評価される。偉容を誇る病院の建築に対し, その後の橋はどのように紹介されるか。

24 **第五の曉橋**の、毒々しいほど白い柱がゆくてに見えた。奇抜な形にコンクリートで築いた柱に、白い塗料が塗つてあるのである。

[611-下-6]

25 **第六の橋**はすぐ前にある。緑に塗つた鉄板を張つただけの小さな**堺橋**である。[612-下-1]

26 橋詰の小公園の砂場を、點々と黒く雨滴の穿つてゐるのを、さきほどから遠く望んでゐた街燈のあかりが直下に照らしてゐる。果たして橋である。

三味線の箱みたいな形のコンクリートの柱に、**備前橋**と誌され、その柱の頂きに乏しい灯がついてゐる。見ると、川向うの左側は築地本願寺で、青い圓屋根が夜空に聳えてゐる。[613-下-3]

曉橋, 堺橋, 備前橋, いずれの紹介もごくあっさりとしている。しかも、「奇抜」で「毒々しいほど白い」とか、「鉄板を張つただけ」とか、「柱の頂きに乏しい灯」とか、よい感情を抱いてはいないことが読み取れる描かれ方である。対して、川向うの築地本願寺は「青い圓屋根が夜空に聳えてゐる」と、「壮大」で「鬱然」とした聖路加病院同様に仰がれる。これもまた、四人の女性というよりは三島自身が下した評価と見做せよう。

4.2 光陰と天候 [17]

27 すでに寢静まつた銀座を、小弓とかな子が浴衣がけで新橋の米井へ歩いてゆくとき、かな子は窓々に鑑戸を下ろした銀行のはづれの空を指さして、／「晴れてよかつたわね。本当に兎のみそうな月よ」

[603-上-18]

「陰曆八月十五日の夜」、曆を裏切らぬ満月を見上げ、かねてより示し合わせていた三人とお付きのみなは願掛けに出る。

28 月の下には雲が幾片か浮かんでをり、それが地平を包む雲の堆積に接してゐる。月はあきらかである。車のゆききがしばらく途絶えると、四人の下駄の音が、月の硬い青ずんだ空のおもてへ、ぢかに弾けて響くやうに思はれる。[606-下-4]

29 川水は月のために擾されてゐる。[607-下-14]

「下駄の音」が響き渡るほど澄んだ夜気の下、川の表にも月光は振り注ぐ。29は、川の流れと揺れに合わせて水面に映る光も揺れる当たり前の眺めを、「月のために」水の側が「擾されてゐる」と見立てる点が面白い。19／19'と同じく目の前の見慣れた現実を裏返すことで、清新な印象を与える。

三吉橋を過ぎるあたりから、かな子は急な腹痛に襲われる。築地橋を渡り切り入船橋が目の前に来たところで堪え切れなくなり、「身をひるがへして、電車通りのはうへ駈け戻つた」。

30 月かげの下を、観世水を藍に流した白地の浴衣の女が、恥も外聞もない恰好で駆け出してゆき、その下駄の音があたりのビルに反響して散らばると思ふと、一臺のタクシーが折よく角の^{かど}ところにひつそりと停るのが眺められた。[610-上-15]

これもまた、容赦のない書き振りである。痛みに耐え切れず、浴衣の裾を蹴立てて走り出すさまを視覚の側だけでなく、「下駄の音があたりのビルに反響」すると聴覚の側からも描く。その音にあてた動詞「散らばる」はあちらこちらへと広がる動きであり、表現が再び視覚へと戻る面白味がある。

31 氣がつくと、あれほどあきらかだつた月が雲に隠れて、半透明になつてゐる。総體に雲の嵩が増してゐる。[611-上-1]

32 はじめは氣のせむかと思はれたが、まだ月の在處^{ありか}のわかる空が怪しくなつて、満佐子のこめかみに、最初の雨滴が感じられたからである。が、幸ひにして、雨はそれ以上激しくなる氣配はない。[611-上-21]

かな子の脱落の後三人は無事入船橋を渡るが、このあたりから空模様が怪しくなり始め、時を同じくして「小弓の身に不運が起つた」。

33 むかうから、だらしなく浴衣の衿をはだけて、金盥をかかへた洗い髪^{あみ}の女が、いそぎ足で三人の前に來たのである。(略)

「小田原町のお風呂屋のかへりなのよ。それにしても久しぶりねえ。めづらしいところで會つたわねえ、小弓さん」[611-下-15]

とうに妓籍を退いたかつての同輩に偶然声をかけられ願の破れた小弓を残し、満佐子はみなと二人だけで先を急ぐことになる。

34 まばらな雨滴が、再び満佐子の頬を搏つた。[612-下-11]

35 橋詰の小公園の砂場を、點々と黒く雨滴の穿つてゐるのを、さきほどから遠く望んでゐた街燈のあかりが直下に照らしてゐる。果たして橋である。[613-下-3]

最後の備前橋に着き、「ほつとして、橋の袂で手を合はせ、今までいそいだ埋め合せに、懇切丁寧に祈念を凝らし」ながら、満佐子は隣のみなが「分厚い掌を殊勝に合はせているのが忌々しく祈願に集中できない。その直後、満佐子自身も思いがけない不運に見舞われるのである。

5 比喩表現 [77]

5.1 指標比喩 [33]

36 毎度のことであるのに、空腹はまるで事故のやうに、突然天外から降つて來る心地がする。[602-下-11]

小弓の空腹感は脈絡なく訪れる。座敷の間はどんなに退屈でも空腹を感じたりしないのに、座敷の前後に限って発作的に腹が空く。望むと望まざるとにかかわらず起こってしまう点で、「事故」の喩えはふさわしい。

37 女たちはそろそろと橋を渡りだした。下駄を鳴らして歩く同じ舗道のつづきであるのに、いざ第一の橋を渡るとなると、足取は俄かに重々しく、檜の置舞臺の上を歩くやうな心地になる。[608-上-5]

花柳界の迷信のような願掛けから古風な「置舞臺」を連想したのだろう。女一生の願いを叶えようとしていることを思えば、そのために渡る橋が人生の「檜」舞台になぞらえられることにも納得がいく。

38 願ひ事は自分一人の問題であつて、こんな場合になつても、人の分まで背負ふわけには行かない。山登りの重い荷物を扶けるのとはちがひ、そもそも人を扶けやうのないことをしてゐるのである。

[610-下-5]

比喩指標といえは「まるで」「やうな」などが挙げられるが、38のように「Aとは違う」と否定してもAのイメージは確実に想起され印象付けられる。似ているものになぞらえるばかりでなく、似ていないものを挙げて捨棄していく形式も、比喩指標の働きに加えられるのである。

「小指と小指をからみ合はせて歩」くほど親密なかな子が脱落したというのに、満佐子の胸には同情よりも「冷酷な感懐が浮ぶだけ」と明示している点も目を引く。幼稚でありながら打算的、そのような自分を正当化する心理は現実にもあり得るが、それをはっきりと描き出す筆致には容赦がない。

5.2 結合比喩 [44]

広く喩詞（イメージ）と被喩詞（トピック）をつなぐ比喩指標がないもので、いわゆる隠喩、活喩、擬人法などが含まれる。

39 この三人の願ひは、傍から見ても、それぞれ筋が通っている。公明正大な望みといふべきである。月が望みを叶へてくれなかつたら、それは月のはうがまちがつてゐる。三人の願ひは簡明で、正直に顔

に出てみて、実に人間らしい願望だから、月下の道を歩く三人を見れば、月はいやでもそれを見抜いて、叶へてやろうといふ気になるにちがひない。[604-下-9]

- 40 「まあ、お嬢さん、粹ねえ。黒塗りの下駄に爪紅なんて、お月さまでもほだされる」[606-上-11]

自分たちの望みを訴えかける対象=月を擬人化している。「ほだされる」はひとりだけ年の離れた小弓らしく古風な語彙選択が見られる。

- 41 満佐子はかな子を氣の毒にも思ふが、その氣の毒さが、ふだんのやうに素直に流れ出ない。[610-下-1]

- 42 祈願はいつしかあらぬ方へ外れて、満佐子の心のなかでは、しきりにこんな言葉が泡立つた。[613-下-15]

19で「月光を流してゐる」とあったように、41では「氣の毒さ」が「流れ出」るもの、42では「言葉」が「泡立つ」ものとされる。月光よりもさらに抽象的なものを具象物、しかも液体に喩えた表現は印象に残る。

- 43 自分のうしろに接してくるみなの下駄の音が、行くにつれて、心に重くかぶさつて来るのである。その音は氣楽に亂れてきこえるが、満佐子の小刻みな足取に比べて、いかにも悠揚せまらぬ足音が、嘲けるやうに自分をつけてくるといふ心地がする。[612-下-18]

かな子と小弓が相次いで脱落して以来みなの存在感が思いの外にじわじわと増していく。付き従う下駄の「足音」は聴覚刺激でやはり抽象物だが、それが「重くかぶさつて来る」と捉えるのは質量を持つ実体への具象化である。カテゴリーの異なる喩詞と被喩詞を用いることで、満佐子の覚える圧迫感が生々しく表現されている。

6 反復表現 [31]

- 44 築地橋は風情のない橋で、橋詰の四本の石柱も風情のない形をしてゐる。[609-上-21]

44' 築地橋は、橋詰の四本の石柱に至るまで風情のない形をしてゐる。

反復は最も単純な強調の手段である。44'のように包括的な描き方にして
も大意に差はないが、重ねて用いられる「風情のない」から、橋に向けられ
る語り手の批判的な目線が感じ取れるのである。

45 奇癖がはじまつたのは、いつごろからとも知れない。呼ばれた家の
臺所で、お座敷に出る前に、小弓が足許に火がついたやうに、「ちよ
いと何か喰べるものないこと」と要求するやうになつたのは、いつご
ろからとも知れない。[603-上-8]

46 少しでも早く第七の橋を渡つてしまはなければならぬ。それまで何
も思はないで急がなければならぬ。[613-上-19]

いずれも同形の文末表現が繰り返される。45ではいつから「奇癖」が始
まったか小弓自身皆目わからないこと、46ではかな子、小弓の脱落を受け
て満佐子が願掛けを急ぎ焦るさまが、強く表されることになる。

47 三叉の橋の中央へ来るまではわづかな間である。わづかな間である
のに、そこまで歩いただけで、何か大事を仕遂げたやうな、ほつとし
た氣持になつた。[608-上-5]

前文の文末表現を後続文の文頭で繰り返す前辞反復は俗に尻取り文と呼ば
れる。二度目の「わづかな間であるのに」は「しかし」のような逆接の接続
語句に置き換えるのが一般的と思われるが、敢えてそのまま繰り返すこと
により、語り手が感じる「間」の「わづか」さを強調する。

48 何か見当のつかない願事を抱いた岩乗^{ねぎごと}な女が、自分のうしろに迫つ
て来るのは、満佐子には氣持が悪い。氣持が悪いといふよりも、その
不安はだんだん強くなつて、恐怖に近くなるまで高じた。

満佐子は他人の願望といふものが、これほど氣持のわるいもののだと
は知らなかった。いはば黒い塊りがうしろについて来るかのやうで、
かな子や小弓の内に見透かされたあの透明な願望とはちがつてゐる。

[613-上-6]

「氣持が悪い」が二回、さらに「氣持のわるい」が続けて現れる。侮って

いたみなと二人きりになった満佐子は、ほぼ同世代でありながら何を考えているか窺い知れない、自分とは全く異質な相手にひどく心を乱されていく。この後、夜の街を浴衣がけで歩く若い女を見咎めたパトロールの警官に追われ、逃れようとして却って乱暴に捕えられ声を上げてしまう満佐子を後目に、みなは悠々と最後の祈念を終えるのである。

7 まとめ

物語としては、熱意をもって“願掛け”に臨んだ三人が三人とも果たし切れず、本人が望んだわけではなく偶然から同行することとなった一人が完遂するという皮肉な落とし話である。架空の伝統である橋づくしを提案したであろう花柳界の女たちが相次いで脱落し、一流の料亭の娘としてのたしなみがあり、高等教育も受けてそれなりに磨かれていたであろう満佐子が、「山出し」で「岩乗」で感情が伺えないと見下していたみなに対し次第に脅威を覚える流れは、スリリングな心理描写となっている。

凝った修辞が多々出現する作品ではない。比喩表現はあっても個性的と呼べるほどのものは少ない。警句めいた言い回し、難読語などもほとんど見当たらない。この書き手の他の作品を思えば、ごく地味でおとなしい。

ただ、満佐子がかな子と気の合う理由として「同い年」「小学校が一緒」だけでなく「器量が頃合」を挙げている点は見逃せない。これだけでははっきりしないが、後に語り手はかな子の口許を「貧しい」と言い切っていることから、「器量が頃合」の満佐子の容貌がどの程度のものであるかも容易に想像がつくのである。また、映画俳優に熱を上げる満佐子の「そこらのファンとちがって、新橋の一流の料亭の娘（である自分）がかうと思ひ込んだことが、叶へられないわけではない」という身勝手に幼い考えを明かしつつ、語り手自身は見解を述べることなく先へ進む。いずれも評価の形容詞を用いることなくマイナス寄りの評価をほめめかす、巧みな間接表現である。

街に行く四人は願掛けのため口がきけない。話しながら歩いていれば見逃

すあれこれを目に留めながら進む道々、夜の街や空模様が丁寧に描かれるのも納得できる。但し、聖路加病院や築地本願寺の伝統的な建築を讃える一方で、コンクリートと鉄板でできた新しい橋梁は素っ気なく、またいささかの侮蔑をもって紹介されるに過ぎない。語り手は小弓、かな子、満佐子の心情を自由に行き来するが、こうした街の見方は彼女たちのものというよりは、明らかに三島自身の価値観が反映されたものと考えられる。

冒頭引用した「あとがき」の「冷淡で、オチがあつて、そして細部に凝つてゐて、決して感動しない」とは、物語の手堅い構成のみを指した発言とは思われない。人物の典型を造形し实景を写し取る手腕を遺憾なく発揮し、緻密で周到な間接表現を散りばめ、その上で自身の強固な美意識をも織り込み得たという、作家・三島由紀夫の満ち足りた思いが言わしめたものであろう。

〔参考文献〕

- 尼ヶ崎彬（1988／1995）『日本のレトリック』筑摩書房／ちくま学芸文庫
 佐藤信夫（1986／1994）『わざとらしさのレトリック』講談社／講談社学術文庫
 下河部行輝（1987）『三島由紀夫の語彙研究序説』岡山大学文学部研究叢書1（非売品）
 下河部行輝（1990）『続 三島由紀夫の語彙研究序説』西日本法規出版
 竹田日出夫（1979）「三島由紀夫「橋づくし」論」武蔵野女子大学紀要14
 中村明（1977）『比喩表現の理論と分類』（国立国語研究所報告57）秀英出版
 中村明編（1979／1993）『感情表現辞典』六興出版／東京堂出版
 中村明（1991）『日本語レトリックの体系—文体のなかにある表現技法のひろがり』岩波書店
 中村明編（1995）『感覚表現辞典』東京堂出版
 中村明（2002）『手で書き写したい名文』角川書店
 中村明（2011）『文体論の展開—文藝への言語的アプローチ』明治書院
 中村明他編（2011）『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店
 野口武彦（1969）「三島由紀夫「橋づくし」」国文学解釈と鑑賞35（特集：短編小説の面白さ）
 原子朗（1970）「三島由紀夫における「文体」——その要旨と、付随的ないくつかの問題——」文体論研究16

- 廣野由美子（2005）『批評理論入門——『フランケンシュタイン』解剖講義』中公
新書
- 前田愛（1986／2006）「三島由紀夫『橋づくし』——築地」『幻景の街——文学の
都市を歩く——』小学館／岩波現代文庫
- 柳川朋美（2005）「三島由紀夫「橋づくし」論——習俗性の断絶と“対話”への
基盤——」奈良女子大学大学院人間文化研究科年報20
- 山口基編（2009）『三島由紀夫研究文献総覧』出版ニュース社